

ヨハネ3.16

「神はその独り子を与えて下さったほどです...」

父の救済計画は「世界」にいるすべての罪深い人々に対する無条件の愛に根ざしていることを私たちは見てきましたこの。句は、その愛の本質を驚くべき方法でさらに限定しています。イエスは「そう」または「そのような方法で」と訳される別の助詞を使って、この点を強調しました。父はどのような方法で世界を愛したのでしょうか。それは「彼のひとり子を与えた」ような方法で、それは全能の神が考え出せる究極の愛の表現にほかなりません。ここで少し掘り下げてみましょう。

の愛は無条件であるだけでなく、神が提供できる最高のものを含め、与えることができるすべてのものを与えるという点で寛大であることが今や分かります。

「与える」という動詞は、要約的な意味で使われています。神の御子における神の与える活動のすべてがこの句にまとめられています。イエスの存在、言葉、行い、所有のすべては、神の敵として生きる、それに値しない罪人に対する父からの愛の贈り物です。その敵意にもかかわらず、ヨハネは証言しています。 **私」たちはみな、神の満ちあふれる豊かさの中から受け、恵みに次ぐ恵みが絶え間なく流れ出ている。」** 1.16

「満ち足りたもの」にはどれだけのことが含まれているのでしょうか。イエスは後にこう言われます。 **「父が持っておられるものはすべてわたしのものである。」** ヨハネ16:15A そこで父は、自分が所有するすべてのもの、文字通り神と宇宙を御子の中に包み込み、愛する敵に与えました。

父は、その「唯一の」息子を与えることによって、その愛をさらに限定しました。永遠に共存する神の永遠の息子は、主イエス・キリストだけです。彼は全宇宙で唯一の存在です。なぜなら、彼だけが神であり人だからです。父はその愛に惜しみません。彼はかけがえのない唯一の息子を与え、彼を独り占めしませんでした。

価値の高い商品の価格は、その希少性に比例して飛躍的に上昇します。イエスは唯一無二の存在です。イエスの価値は文字通り計り知れないほど無限ですが、父なる神はイエスを敵に与えました。

最後に、この文脈では、父が「このように」与えたということには、イエスが14節と15節でニコデモに紹介した息子の死も含まれていました。パウロはローマ8章32節で「**私たちのために、ご自分の子をさえ惜しまなかった**」と述べています。言い換えれば、神は敵を愛するあまり、義なる完全な御子を十字架の死刑から逃れさせず、敵を赦すことができたのです。父は、御子に与えた以上のものを私たちに与えたのです。

これは、最もそれに値しない人々への途方もなく寛大な施しです。これが三位一体の愛のすることです。それは、限りなく最善のものを与えるのです。

「彼を信じる者が一人も滅びないようにするためです...」

イエスの3番目のフレーズは、父の愛のもう一つの側面を明らかにしています。無条件であり、最善のものだけを与えることに加えて、あらゆる危害から守ってくれます。 **「それは、彼を信じる者が一人も滅びないようにするためです...」** まず、この文に含まれるいくつかのキーワードと概念に注目しましょう。

「そのために」は、父が敵に息子を愛の贈り物として与えた意図を説明する目的節を導入します。父は贈り物を与える際に二重の目的を持っていました。神はすべてを計画的に行い、偶然に行うことは何もありません。あなたがあらゆる点で完璧であれば、それは普通のことであり、三位一体はまさにそれです。ですから、神は私たちにイエスを与える際に、明白で愛に満ちた二重の目的を持っておられます。目的1は何でしょうか。

「滅び続けることはない...」 愛はあらゆる危害から守り、最善のものだけを与えるので、三位一体の愛は、愛する人々に影響を与える完璧さに欠けるものには抵抗します。罪深い人間の親であっても、私たちは子供たちに良い贈り物を与える方法を知っており、子供たちを危害から守ろうとします。愛する人が危険にさらされたり、痛みを経験したりしているときに、ただ傍観することは不可能です。

ここでの動詞は現在形なので、すでに進行中の「滅びる」という行為を説明しています。神の敵である私たちは、神を拒絶したときに無意識のうちに滅びることを選択し、最終的な完全な破滅につながる劣化のプロセスがすでに私たちの内部で進行しています。それは、私たちには知られていないが、それでも貪欲に死の力で私たちの体全体を乗っ取っている癌のようです。

そうです、イエスはここで地獄での永遠について語っておられます。神の愛は、神の敵にさえも、いかなる危害も永遠に、そして取り返しのつかないほど反対させます。この罪と死への憎しみは、神の「怒り」と呼ばれています。それは神の愛の純粋な表現であり、罪深い人々の「怒り」と呼ばれる感情的な激怒の不合理な爆発と混同すべきではありません。誰かを愛しているなら、イエスが示したように、自分の命を犠牲にしても、その人を危害から守ります。神は、敵が地獄で滅びるという考えさえも憎むので、愛をもって、御子を通して永遠の滅びから逃れる完璧な道を用意してくださいました。

「彼を信じる者は皆...」 「滅び」からの救いは、神の敵全員（「皆」）に対する神の愛情深い意図ですが、それはイエスを「信じ続ける」人々にのみ与えられます。これも現在形の動詞で、生涯にわたる信仰のプロセスを開始する決断や決意を表しています。

関係を持てる相手は、自分が信じている相手だけです。そもそも、イエスを信じないことが「滅びる」原因なので、「信じる」ことによってのみ解消できます。（イエスは、次の節で、イエスを信じないと

いう決断が「滅びる」原因となることをさらに詳しく説明します。) ヨハネは再び、イエスが「信じなさい」と言われた言葉を引用し、イエスのトレードマークである前置詞を使って、信仰の浸透力と、信者と彼らが信じた相手との結びつきを暗示しています。

神」自身の永遠の命という性質を持ち続けることができる。」

イエスの4番目で最後のフレーズは、父なる神の三位一体の愛に基づく救済計画についての説明を完結し、息子を賜った神の2番目の目的を説明しています。神の息子という愛の賜物は、無条件であり、最善のものだけを与えるというだけでなく、あらゆる危害から守るという目的と、イエスを信じるすべての人に神独自の永遠の命を与えるという目的の2つがあります。

イエスは、3.15で、彼を信じるすべての人に永遠の命の贈り物を約束しました。そして、3.16で、永遠の命の贈り物の起源(「神のために」)は、父なる神の愛に基づく救済計画であると説明しました。3.15と16の間の思想のつながりは、キーフレーズ「彼(イエス)を信じ続ける人が、神独自の永遠の命を持ち続けるため」の繰り返しによってさらに強調されています。ヨハネは、誰にも福音書のこの重要なポイントを見逃してほしくありませんでした。

ここで見られるのは、最高の生命の質、つまり神自身の創造されていない完全な生命体です。「滅びる」とは、永遠の死という、考えられる限り最も低い否定的な生命の質を表します。一方、「永遠の生命」とは、神自身の生命よりも優れたものは何もない、考えられる限り最高の肯定的な生命を表します。

これら二つの目的は、慈悲(「滅びない」)と恵み(「永遠の命を得る」)の表現です。

慈悲とは、相手が当然受けるに値する罰を与えない行為です。私たちの罪は、定められた罰/処罰として永遠の死、つまり「滅び」に値しました。神の慈悲とは、神が私たちにその罰を与えないことを意味します。神はどのようにこれを行うのでしょうか。それは、神の唯一の息子を身代わりの犠牲として与え、神の死によって私たちに代わって罰を支払うことです。これにより、神は罪に対する定められた罰が支払われたことを見て正義を保ち、私たちの罪を許し、罪の永遠の結果から私たちを永遠に解放することによって慈悲深くなることができます(イエスはまったく慈悲を受けませんでした!)。私たちは実際に受けるべき死刑(滅び)を受けません。それが慈悲です。

一方、恵みとは、受け取るに値しないものを誰かに与える行為です。たとえ私たちが罪を犯さなかったとしても、神のみに属する命を受け取るに値しません。創造物には何百万もの種類の生命体がありますが、人間だけが神独自の種類の命を共有するというこの贈り物を受け取ります。それは神が愛をもってそれを与えることを決めたからであり、私たちがそれを得る方法があるからではありません。

神はどのようにしてこの最高のポジティブな贈り物を私たちに与えてくれるのでしょうか。もう一度言いますが、それは神の唯一の息子と、この宇宙で最も質の高い生命体を含む、彼の中のすべてのものを私たちに与えることです。それが恵みです。私たちは誰も値しないものを自由に受け取るのです。

神の二重の愛の目的は、神の無限の慈悲と恵みの表現でした。この慈悲と恵みの組み合わせにより、人間のいかなる行為や努力も完全に排除されました。そのため、イエスは完全な自信を持って「**信じる者なら誰でも**」と**言うことができました**。

コメント：イエスの永遠の命という賜物が、死、つまり滅びを飲み込むことを理解するのは有益です。神の慈悲は、イエスの死が私たちに死の罰を払う必要から解放したことを意味しました。それによって、私たちに永遠の命の可能性が回復されました。それは、神の恵みによって実際に与えられたものです。しかし、それだけではありません。

自身の生命の賜物は、機能的に、永久に滅びる可能性を排除しました。この生命を殺すことはできません。傷つけたり、害したりすることはできません。永久に老化させたり、変化させたりすることはできません。それは自存する生命です。食べたり、飲んだり、呼吸したりする必要はありません。この種の生命は、地獄の奥深くでも、太陽の表面でも、あるいは宇宙のどんな場所でも、問題なく生きることができます。

イエスの復活の生命体は、神の永遠の生命とその人間性を不可分で永遠の一体性で結び付け、生命は死を飲み込み、イエスの中で永遠に滅びました。それが、神が新契約の永遠の時代にすべてを成し遂げる方法です。神は、イエスがすでに満ちているもので私たちに満たしてください。

規則を守るだけではだめです。自己啓発や向上では、神のいのちは得られません。神のいのちはすべて神の慈悲と恵みによるものであり、その結果、私たちは行いではなく信仰によって神の豊かさの中で生きるのです。イエスにある永遠のいのちの賜物は、私たちがすでに神の内にある他のすべての小さなものも受け取っていることを意味します。 **「私たちはみな、神の豊かさの中から恵みを受けて、恵みに次ぐ恵みを、尽きることなく流れ出させているからです。」** 1.16 慈悲の必要は、神の恵みの豊かさによって永遠に飲み込まれます。ハレルヤ！

ヨハネ3.17

この節は 3.16 ほど有名ではありませんが、それでも壮観であり、16 節と同じ思考の流れを続けています。ここでは、イエスを信じるすべての人に救いをもたらすという父の愛の計画の説明を続けるためにイエスが使用した重要な用語と文法的な洞察を示します。

「**一のために**」と訳されている接続詞で始まります。これは、17 を 3.14-15 に結び付け、メシアの命を与える死と復活の働き/役割の 2 番目の理由として示しています。(最初の理由は父の愛でした。) 2 番目の理由は、父の救いの意図でした。

「**神は御子を遣わされたのではない**」 3.16 でイエスはこう言っています。「神 (父) は御子をひとりお与えになった」。ここでイエスは「与える」を送る」とさらに限定しています。これは名詞として使

われるときに」使徒」と訳される単語の動詞形です。イエスはヘブル書の中で何度も「使徒」と呼ばれています。「遣わされる」ということは、達成すべき特定の使命と、自分の利益ではなく、すべてのことにおいて「遣わした者」を代表する役割を伴います。この節でイエスは、ご自身の「遣わす」使命について4つの真実を明らかにしています。以下がそれです。

(1) **「御子を世に遣わし...」** その使命は「世」、つまり歴史上すでに永遠の死の宣告を受けているすべての罪深い人々、つまり神の敵に対するものでした。イエスは義人を招くために来たものではありません。義人はいないからです。イエスは罪人への使命のために来たのです。なぜなら、私たちこそが罪人だからです。確かに、イエスの心の中では、私たちは「世」なのです。

(2) **「神は、御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではない。」** これには2つの理由があります。次の節は、そのうちの1つを説明しています。私たちは、イエスを信じるか拒絶するかを決断によって実際に自分自身を裁くので、イエスは今私たちを裁く必要はありません。しかし、イエスが今私たちを裁くために遣わされなかった2番目の理由は、イエスが世の終わりにすべてのものを裁くという特定の目的を持って必ず地球に戻ってくるからです。裁きはヨハネの福音書の重要な概念であり、これらの節はそれを物語に導入しています。

(3) **「しかし、世が救われるためには...」** ここで、私たちはこの一節全体(3.1-21)を解釈するために最初から使ってきた言葉、「救う、または救済」にようやくたどり着きます。私たちが救うことが父の意図であったため、イエスは死んで復活しました(3.14-15)。

「救う」ということは、ネガティブな、あるいは危険な状況、この場合は永遠の「滅び」から救い出すということ以上の意味があります。誰かを「救う」ということは、その人に完全な健康を与えることです。例えば、イエスが誰かを癒したとき、病気を治しただけではなく、完全な健康を与えたのです。視力を与えたとしても、それは視力20/20の新しい目でした。ワインを与えたとき、イエスは彼らが飲んでいた質の悪いワインを単に元に戻したのではなく、彼らが今まで味わったことのない、はるかに質の良いワインを作ったのです。

「は私たちが救う」ことを意図しているため、永遠の命を含むイエス自身の完全性（豊かさ）を私たちに与え、神の豊かさの他のすべても与えます。そして、この「救う」行為は受動態です。それはイエスが与えてくれるものであり、私たちは信仰によって受け取りますが、自分で作り出すものではありません。それはすべて神から私たちに与えられたものです。最後のフレーズは、この点をさらに強調しています。

(4) **「彼(イエス)を通して」** イエスは私たちが救うために遣わされた」」ので、ここでは特定の文法構造を使っており、それはイエスを信じる人々に救いを創造し、与える個人的な代理人としてのイエス自身の役割を強調しています。すべての救いが**「彼が遣わした者を通して」**流れ、それを成し遂げるのが父の意志です。教会は救うことができません。自己意志は救うことができません。聖書は私たちが救うことができません。イエスだけが父によってこの役割を与えられており、それは三位一体の中でのイ

イエスの特別な賜物と働きの一部であり、したがって地上の罪人の間でもそうです。17節は、3.11-15でイエスがご自身に帰している救いの役割/働きがなぜイエスにあるかについての重要な追加の説明です。

コメント: イエスは救うという神の使命に「遣わされた」のです。つまりイエスは宣教師の原型なのです。

ここで使われているギリシャ語は英語では「宣教師-使命を帯びた人」という意味になります。どういうわけか、私たちのほとんどはイエスを宣教師とは考えていませんが、イエスは宣教師なのです。初期の教会では、イエスを筆頭にすべての指導者が宣教師でした。新約聖書は宣教師によって書かれました。実際、新約聖書の中で牧師兼教師によって書かれたのは、ヤコブの手紙という1冊だけです。

教会が自分たちのプログラムや活動に集中してしまいがちです。しかし、ヨハネの福音書や新約聖書の他の部分と同じように、イエスの「世界への宣教師」としての役割が私たちにとっても重要なものとなるなら、状況は根本的に変わるでしょう。私たちはイエスという宣教師に従っています。イエスは毎日絶えず宣教に携わり、私たち一人一人を弟子として募集し、「すべての国の人々を弟子にする」という使命に加わってもらっています。あなたはイエスが世界に向けて遣わした証人として参加していますか？

ヨハネ3.18

の愛の計画における救いの起源（イエスを通して、信仰によって）（3.16-17）という話題から、不信仰の性質とその結果へと話題を移します。ヨハネによるイエスのユダヤ教宣教の記述は、イエスを信じて救いを受けた人々の数多くの例を提供するために書かれたことを思い出してください。

対照的に、これらの節とそれに続く洗礼者ヨハネの最後の証言は、不信仰の現実を探り始めます。そこには、深刻な警告と、不信仰の炎を燃え上がらせ、持続させる動機についての衝撃的な描写が含まれています。今日は、このセクションの冒頭にある、慰めとなる最初のイエスの約束を取り上げます。このすばらしい約束の2つの重要な要素は次のとおりです。

(1) 主題句: 「**彼を信じ続ける人は...**」ここでもイエスは、現在分詞を使って、信仰を継続的なプロセスとして説明しています。ヨハネの署名「彼に」は、信者と私たちが信じる方との結びつきを強調しています。信仰は、私たちをイエスに結びつける強力で生きた電力線です。私のラップトップの電源コードは、磁石を使ってコンピューターにしっかりと固定されています。これは、ここでイエスが念頭に置いている種類の信仰をよく表しています。

(2) 述語: 「**裁かれていない**」。上記の「信じる」と同様に、「裁く」という動詞も進行中の動作の状態を表しており、助詞ない」を使用して否定されています。また、これは受動態であり、主語が裁きを受けていない進行中の状態にあることを示しています。

イエスは身代わりの死によって私たちの罪の裁きを負われました。そのため、信者は裁きから解放され続けています。私たちは常に裁かれていないので、罪に関して裁かれることはありません。それは、神の御子の死を代償として私たちを赦してくださった神の慈悲の一部です」。私たちは滅びから解放されます。イエスを通して」なんと素晴らしい救いでしょう！

コメント: ヨハネ 3.16-17 は、イエスを通して裁きから救われるのは神の愛の産物であると教えてくれました。愛はあらゆる害から守ってくれます。愛はそれ以上のことはできません。そのため、ヨハネは第一の手紙でこう書いています。 **「そして私たちは、神が私たちに対して抱いている愛を経験し、それゆえ知り、そして永遠に信じています。神は愛です。愛を住まいとする者は神を住まいとし、神もその人を住まいとされます。これによって、愛は私たちの中に完成された状態となり、私たちは審判の日に完全な確信を持つことができます。なぜなら、神がそうであるように、私たちもこの世でそうであるからです。愛には恐れがありません。完全な愛は恐れを打ち消します。恐れは罰を伴うからです。罰を恐れる者はまだ愛において完成されていません。」** ヨハネ第一 4.16-18

イエスが私たちの代わりに罪の罰を受けてくださったので、私たちはそれ以上の裁きから解放されました。それが私たちに対する神の愛の働きです。それがまさに今日の私たちの言葉でイエスが語っていることなのです。

最後の審判に関する4つの重要な真実

私たちは、イエスを信じる者はすべての裁きから救われるという約束を喜んできました。この段落の残りの部分で、イエスは、神を信じないことに伴う避けられない裁きについて、4つの重要な真実を私たちに教えています。これらの重要な事実は、敵を愛し、彼らがまさにこの裁きを免れるように彼らのために命を捧げるほどの深い愛をもって、不信者に警告するものです。すべての弟子は、ここで掘り下げて、これらの4つの真実を習得する必要があります。そうすれば、同じ愛をもって、まだイエスを信じていない人々にそれらを伝えることができるのです。

裁きについての真実その1：裁きはイエスとの関係の状態に焦点を当てており、「良い」または「悪い」行動に焦点を当てていない

最初の真理は、裁きは各個人とイエス・キリストとの個人的な関係、あるいは非関係性を中心に行われるということです¹⁸。節の後半はこの真理について述べています。

問題は、「イエスとは誰か？」ということです。イエスは、自分が「処女から生まれた唯一の者」（人間の性質）であり、「神の子」（神の性質）であり、神の救世主として忠実な証人であり、罪の身代わりの犠牲であると信じていました。（ヨハネ 3.11-15）。これらは、18節でイエスが「名前」または身元で意味したことの最低限の内容です。

したがって、イエスとの個人的な関係は、イエスの救世の業を含め、イエスがメシアであるという神聖なアイデンティティを信じることによってのみ築くことができます。たとえば、数学の先生と個人的な関係を築こうとする場合、まずその先生が存在を信じ、次に先生としてのアイデンティティを信じ、その信仰に基づいて先生の教えに従わなければなりません。まずその先生が誰で、何をしているのかを信じなければ、その先生を経験することはできません。したがって、イエスが誰であるか、つまりイエスの名が誰であるかについては、各人が個人的に判断しなければなりません。

イエスはこの最初の真理において、イエスが神の子ではなく、神聖なる救世主ではなく、神の真理の忠実な証人ではなく、身代わりの犠牲でもないと信じる決断をする人々は、イエスに対して自分自身の判断を下したのだ、と述べています。

イエスはこの部分で、現在形の動詞 1 つ (「信じない」)、完了形の 2 つ (「すでに裁かれた」)、および「彼の名を決して信じないと決めた」を使用して、彼が主張したとおりの人物ではないと決定的に判断したために、決して信じないと固く最終的に決心した人々について話していることを示しています。

誰かがイエスの正体について誤った最終判断を下すと、その人はイエスと個人的な関係を持つことは決してできなくなります。決して。イエスを信じないというその人自身の決断は、その人をイエスと個人的な関係を持つ可能性から永久に締め出すことになります。イエスを信じることはイエスとの重要な結びつきを生み出します。イエスを信じないことは、不信者をイエスから引き離します。

コメント: ヨハネの福音書全体を通して、イエスは罪を、イエスを信じることを拒否することと定義しています。(16.9) この罪の定義は、このセクションでイエスが語っている裁きの根源です。イエスを含め、信じていない神と関係を持つことは不可能です。

したがって、判断における問題は「あなたはどれだけ良い人か？」ではありません。人生で「良いこと」と「悪いこと」をどれだけやったか？完璧さが基準であるとき、たった 1 つの「悪いこと」で完全に悪い人になってしまうのです。あなたは完璧か、そうでないかのどちらかです。半完璧は欠陥があり、「悪い」のです。

「悪い」か、比較的「無害」かという観点からランク付けします。これは神の前では愚かなことです。私たちは、すべての関係において愛である三位一体の存在によって創造され、その神に愛され、その神に愛を返すために創造されました。まず信じていない神を愛することはできません。ですから、私たちが行うすべての「悪い」こと、つまり私たちのすべての罪は、神の愛における神の本質に対する信仰の欠如、そしてそれに応じて私たちがどうあるべきかの表れなのです。

間違った行動は間違った信念の表れです。神への愛の表れではない私たちの行いはすべて罪であり、その罪は神への不信仰から生じます。私たちキリスト教徒は、この基本的な真実を本当に理解するのに苦労しているようで、文化的または伝統的な規範に基づいて道徳観を定めることの方が、イエスと罪と正義の本質に関するイエスの見解に同調することよりも多いようです。

審判についての真実その2: 私たちはこの人生で自分自身を裁きますが、神は私たちを裁きません

これはすでに18節で暗示されていますが、3.19の最初のフレーズで明確に述べられています。 **「そして、これが裁きです...人々が暗闇を愛したことです...」**

が私たちを判断する際の問題は「良い」か「悪い」かではありません。なぜなら、私たちは皆罪深く、完璧な「良い」は私たちの誰にもまったく手の届かないものだからです。信じるか信じないかという私たちの個人的な決定は、キリストについての私たち自身の自己判断であり、*同時に私たち自身についての判断です*。イエスが、そしてイエスの証人チームの残りの人々がイエスがイエスであると証言している方であると信じないことを選択するとき、私たちはまずイエスを判断し、そしてイエスについての最終的な決定を下します。 **「イエスがご自身とイエスの働きについて何と言ったかは知っていますが、それは私には関係ありません。」** 私たちはイエスに対する個人的な反応でイエスを判断します。

イエスをこのように裁くことで、私たちは、イエスとその教えを無関係、あるいは間違っていると拒絶するほど自分は賢いと判断するのです。私たちは、イエスと離れても自分の条件でうまく生きることができ、最終的にはイエスなしで死と永遠を迎えることができると判断するのです。このような自己判断には、自分に対する大きな信仰と自信が必要です。それは実は宇宙レベルでの愚かさです。イエスと聖書は、傲慢な自己欺瞞を呼び起こします。しかし、世界中の人々は、自分がした選択の重大さにまったく気づかずに、毎日それを行っています。

ほとんどの人は、キリストを拒絶することに伴う自己批判にさえ気づいていません。だからこそ、イエスはここで愛情を込めてそれを指摘しているのです。誰かが自分の判断や決断の知恵をイエス・キリストの意見よりも優先することを選ぶのは、時代における重大な瞬間です。それは、次のようなことを言っているのです。 **「結局のところ、イエスは偉大な指導者でも精神的な教師でもなかったようだ。実際、私はその偉大な教師なのだ...結局のところ、私自身の意見は彼の意見よりはるかに優れている。」** これが、ここでイエスが語っている自己批判なのです。気が遠くなるような話ではないでしょうか。

審判の真理その2は、神は誰も地獄に送らないという意味です。神はその重大な審判を私たちに委ねています。

現状はこう」です。私たちはすでに滅び」つつあり、神から永遠に引き離された状態、つまりあらゆるレベルでの死の状態にあります。それでも神は私たちを愛し、私たちが自分たちの状況を理解し、神が私たちを永遠に救うために何をしてくださったかを知るために、証人チームの絶対的に信頼できる重要な証人として御子を与えてくださいました。父、子、聖霊は協力して、私たちの悲惨な状況に対する唯一の解決策を生み出し、イエスは死と復活を通して救いのパッケージを完成させるために必要なことをすべてすでに行いました。すべて準備が整っています。

イエスは来られ、人類にすべてを語られました。証人チームは常にイエスの側に立って、イエスの証言を強化します。つまり、人間が対処しなければならない唯一の問題は真実です。」「イエスはイエスが言うとおりの人物なのか、そうでないのか？」という問いに答える必要があります。したがって、すべてを決定するのは、イエスと私たち自身に対する私たちの判断です。

ボールは私たちのコートにあります。私たちは、ゲームに参加するか、参加しないかを選択します。つまり、生きるか死ぬかの判断を下すのは私たちです。神は自らの選択で誰かを地獄に送るのではなく、私たちが下した判断を忠実に執行するだけです。

神は、すでに。ここから出て行け！私を放っておいてくれ。私はあなたとは何の関係も持ちたくない」
」と言っている人たちに対してのみ、」私から離れ去れ」と言うのです。

そこでイエスは彼らにこう言います。」「あなたの思い通りにしてください。それはわたしが選んだことではありませんが、わたしはあなたの選択を支持します。だから、行ってください。」

」人々を地獄に送る神など信じられない」と言う人は、真実その2を完全に見逃しています。その言葉は、真実その3でわかるように、単なる言い訳です。しかし、これは信仰に対する非常に一般的な反論です。だからこそ、イエスのこの重要な説明は非常に重要なのです。永遠の運命について判断するのは神ではなく、人々なのです。

神の愛は、一度もチャンスを受けるに値しない人々、つまり神の敵に二度目のチャンスを与えるようにさせました。神は、救いのすべてを神の恵みの無償の贈り物として提供するようにさえしました。しかし、神の敵は、自分自身と神を正直に判断しなければなりません。求められているのは、否定ではなく、正直さです。

判断についての真実その3: イエスを神の救世主として信じないことを選んだ人々は、実際にはイエスの真実に対する評価ではなく、すでに愛しているものによって動かされています。

このセクションに入るとき、イエスは私たちの心を完全に知っている方だということを思い出すと役に立ちます。イエスを拒絶する私たちの本当の動機について話す資格があるのはイエスだけです。イエスは自分が何を話しているのかを知っています。

イエスはこう言いました。」「**光はこの世にとどまるために来たのです...**」これはヨハネの福音書の冒頭の言葉(1.4-5)に遡り、イエスは「人々の光」と表現されています。聖書の中で最も豊かに象徴が使われているこの福音書では、「光」がイエスのアイデンティティ、つまりイエスが誰であることを表す主要な象徴となっています。

光を啓示として考えてください。イエスは受肉して天から降りてきて、神についての真実を明らかにしました。そして神として、イエスは最後の究極の啓示です。イエスは3.11-13でこの役割/働きをすでに説明しています。イエスは光として来られたことを説明するために完了形を使用し、光が彼の中に輝き続けていることを強調しました。したがって、私は動詞を「とどまるために来た」と翻訳しました。

イエスが真理として明らかにしたことは、永遠に真理であり続けます。イエスは、新しい情報や知識を取り入れるために、決して後戻りしたり、自分の立場を変えたりする必要はありません。イエスは、神としての救いに関する永遠の真理を確立し、明らかにしたので、イエスが明らかにしたことを信じないと自分で判断する人は、その判断を真理に基づいて行うことは絶対にできません。真理は一つです。イエスがそれを明らかにしたのであれば、それに反する他の「真理」は存在しません。

真実と矛盾する考えは、どんなに魅力的で説得力のあるものであっても、定義上は嘘です。ですからイエスは、人々が神以外の何かをすでに非常に愛しているため、それを放棄できないことが、イエスを拒絶する根本的な原因であると明らかにしています。

真実は、罪深い人々の行動は、真実への献身ではなく、欲望に基づいているということです。イエスはこう言いました。「人々は光よりも闇を愛した。」人々は闇を愛しているだけでなく、イエスは次の節で「光を憎み続けている」とも付け加えています。これらは確かに強い欲望です。

「神は世界を深く愛された」と言っているのと同じ動詞 (アガパオ) と時制を、罪深い人々が「闇を愛した」ことに対して使っています。段落全体の支配概念である同じ動詞 (「神は世界を深く愛された。人々は闇を愛した」) を使うことで、イエスはここで重要な対比を描いています。

「世界」、つまり神の敵である罪深い人々を、彼らの罪にもかかわらず無条件に愛しています。罪深い人々は闇そのもの、つまり彼らの邪悪な行為、罪を無条件に愛しています。神の愛は、神が罪の破壊性を憎むようにさせます。罪深い人々の罪への愛は、彼らに救いの真理を憎むようにさせます。神は罪人を愛し、彼らの罪を憎みます。罪人は自分の罪を愛し、神を憎みます。

イエスのこの洞察は、すべての心の中に潜む悪の深さと、私たちの罪深い性質がいかに歪んでいるかを示しています。人間の行動は邪悪な欲望、つまり「悪への愛」に基づいています。したがって、キリストの拒絶は決して真実に基づくものではありません。それは常に悪への愛の表れです。そしてその悪とは、神の唯一の息子であるイエスを信じないことです。人間の肉体をとった神を拒絶する悪に比べれば、他のすべては比較にならないほど小さいものです。

が敵に対して示すアガペーと、罪深い人々が悪に対して示すアガペーの対照には、もう一つの側面があります。これは胸が痛くなるような考えです。どちらの愛もイエスを犠牲にすることを伴います。神の無条件の愛は、神がその独り子を敵のために犠牲として与えることを促しました。罪人が悪に対して示す無条件の愛は、私たちがイエスを永遠に知る機会を放棄し、イエスにある神の豊かさをすべて犠牲にすることを促します。

神は私たちを救うためにすべてを放棄しますが、罪人は神を拒否するためにすべてを放棄します。罪人にとって悪を続けることは非常に望ましいことなので、それが無駄になることを前もって知りながら、私たちが愛してすべてを放棄する神を避けるために、喜んで地獄に突進します。罪人にとって、それはなんと途方もなく、愚かで、凶悪で、自己破壊的で、邪悪で、まったく不必要な犠牲でしょう。しかし、それが悪への愛のために私たちが行うことなのです。

ヨハネ 3:16 が聖書の中で最も栄光に満ちた一節であると同程度に、ヨハネ 3:19 は聖書の中で最もグロテスクで恥ずべき啓示の一つです。しかし、それが人間の罪深さの本質であり、誰もそれから逃れることはできません。

このように私たちの罪深い墮落の深さを見ると、3.16-17 にある神の敵に対する愛がさらに強調されます。神が、私たちのように本当に卑劣で邪悪な敵を無条件に愛することは、信じられないほどです。大多数の罪人がその犠牲を拒否することを神が事前に知っていたにもかかわらず、神の息子を犠牲にするほど罪人を愛することは、あまりにも過大です。

十字架上のイエス」。の祈りをもう一度聞いてください**父よ、彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか知らないのです。**」このように愛することは、神の最大の栄光です。だからこそ、イエスは生涯を通じて、恐れや不安ではなく、神の性質の究極の啓示における高揚を期待しながら、死を待ち望んでいたのです。だからこそ、私たちは十字架を誇りに思うのです。そしてだからこそ、神はあなたを無条件に、永遠に愛しておられると、あなたは絶対に確信できるのです。

全能の神が、このように御子を授けることによって既に示して下さった愛以上に、あなたを愛することは不可能です。神の唯一の処女御子の御名を一度信じれば、その愛からあなたを引き離すものは何もありません。あなたは、あなたに対する神の愛の高さと深さが、献身、崇拝、賛美、感謝、そしてあなたの全存在を神に捧げることによって神に返されることを許していますか？

判断についての真実その3: イエスを神の救世主として信じないことを選んだ人々は、自分がどれほど悪を愛しているかを認めたくないために真実を拒否します。これは傲慢です。3.19

イエスがこの点を説明するために使った重要なフレーズは次のとおりです。

イエスは、イエスを信じないという判断を下す人々のライフスタイルについて説明し続けました。イエスは、最終的な決断を形作ることになる継続的で習慣的な行動や態度を示すために、2つの現在形の動詞を使いました。イエスはこう言いました。「**悪を行い続ける人**」と「**光を憎み続ける人**」。罪人は闇を愛しているので、光を憎み続けます。つまり、イエスを信じないことで悪に従事し続けるということです。

の真理の啓示の光に入ることを彼らが拒否し続ける原因となります。ここでイエスは、真理を拒否する根本的な動機であるプライドに触れます。イエスはこう言います。 **「彼らは自分たちの行いが暴露されることを望まないからです。」**

イエスの完全な正義と、イエスの証言の真実は、どちらも不信仰の悪を明らかにします。罪深い人々はプライドが高すぎて、自分が完全に間違っていることを認めることができません。結局のところ、彼らはプライドと自信が高すぎて、イエス自身を嘘つきと決めつけ、イエスが自分について主張したことは完全に間違っていると決めつけます。そのため、自分の罪深さを認めるのではなく、プライドが光から遠ざかり、それによって悪事を続けます。プライドは宇宙で最も破壊的な態度です。それはすべての不信仰、したがってすべての罪の核心です。

19節と20節の間のイエスの言葉の選択には、このプライドの問題を強調する明快な対比があります。イエスは、自分を拒絶する人々を **「悪を行い続けるすべての人々」**と表現しています。ここで罪人は悪を行います。彼らは邪悪な方法で行動し、振る舞います。

「真理を実践している」人々として描写しています。信者は善行をするのではなく、イエスの真理を受け入れることを実践します。救われた罪人が実践するのは、私たちの罪深さ、救いの必要性、そしてイエスが本当に「救う神」であるという真実を正直に認めることです。これが真理を **「告白する」**という意味です。つまり、神がそれについて言うことに同意するのです。救われた罪人はこれを行います。救われていない罪人は行いません。

救いは行いによるものではありません。たとえそれが悪事であっても、自分の行いにプライドを持つ人はプライドを大切にし、それに固執します。そしてそのプライドは、自分の意見が人間の肉体を宿した神よりも優れていると判断することにつながります。彼らはイエスを間違っていて、自分は正しいと判断します。プライドは地獄への高速一方通行の高速道路です。

神はプライドを憎みます。私たち人間は、それが自分や他人にどう影響するかに基づいて悪をランク付けします。殺人のようなことは、多くの人に甚大な影響を与えるので、私たちはそれをひどいことだと考えます。しかし、神が行動を評価するのは、それが私たちや他人にどう影響するかではありません。真実その 1 を覚えておいてください。裁きの基準は、イエス・キリストとの関係です。プライドほど効果的にイエスとの関係を破壊するものではありません。

対照的に、イエスは史上最も謙虚な人であり、神でした。謙虚さは三位一体の本質です。私たちキリスト教徒は、神がそうであるように、傲慢さの邪悪な性質を真剣に受け止め、それに応じて罪に対する評価を調整する必要があります。傲慢さは、あらゆる態度の中で最も致命的な態度です。

三位一体の救いに関するイエスの教えの結論

の会話の結論であり、この説明を一周して、探求者が始めたところに戻します。おそらく、この節を理解する最も簡単な方法は、それについて3つの簡単な質問をすることです。誰が？何を？なぜ？

イエスは誰について話しているのでしょうか？」真理を行っている人...」私たちは、イエスが不信仰の邪悪な行為と弟子たちの信仰を対比しているのを見ました。必要なのは行いではなく、イエスと自分自身についての真理を信じる正直な心です。

これは、イエスがガリラヤでの宣教活動の後半で、種まき人（イエス）、種（福音）、土（メッセージを聞く人々）のたとえ話をされるときに強調されるのと同じことです。そこでイエスは、4種類の土、つまり、神の言葉に対する4つの異なる反応を示す4種類の人々について語っています。4種類の土のうち、1つだけが、弟子の真理に対する反応をモデル化しています。イエスは、そのような信者を「**御言葉を聞き、それを理解する、正直な心を持つ人々**」と呼んでいます。信仰によってイエスと自分自身についての真理を受け入れる誠実さこそが、救いとクリスチャン生活に必要なすべてです。これが、3.21 イエスが明らかにした真理を正直に信じる人々でイエスが説明している人々です。

何をするのでしょうか。彼らは「**光に近づく続ける**」のです。つまり、これらの人々は自分たちの行動を「光」、つまりイエスの真理にさらし続けます。彼らは「真理を信じる」ライフスタイルを一貫した実践として実践します。

信者はほとんどの場合正しいことをしますが、時には間違ったことをすることもあります。しかし、私たちが神の真理を求め、自分の行動について自分自身に正直である限り、三位一体は常に真理を用いて、私たちが間違ったときに悔い改め、許し、そして神の恵みによる新たな始まりへと導いてくれます。同じ真理が、正しいことをする私たちを導き、強めてくれます。いずれにせよ、誠実な信仰心で「**真理を行う**」ことは、信者をイエスの言葉と聖霊を通してイエスの光に絶えずさらすことになり、それが鍵なのです。

信者はなぜ「**光に近づく続ける**」のでしょうか。それは「**彼らの働きが神によって、また神によってなされたことが明らかにされるため**」です。ここで私たちは一巡します。ニコデモは次のように言って会話を始めました。「**私たちはあなたが神から遣わされた教師であることを知っています。神が共におられなければ、あなたのなさっているような働きはだれにもできないからです。**」ニコデモは自分の力ですでに神を見て知っていると思っていました。そこでイエスは、救いは実際には最初から最後まで三位一体の神の働きであり、人間の働きではないと説明しています。

救いは父の永遠の愛の計画に従っており、父の唯一の息子を通して仲介され、聖霊の力によって実行されます。イエスを神の救世主として信じるすべての人は、この言葉の真実を発見し、喜んで告白します。「**神は私にこれをしてくださったのです！この救いは神の恵みの賜物であり、私の行いによるものではありません！**」

真の信者は、私たちを救う三位一体の神の偉大さをすべての人に知ってもらい、賛美してもらいたいと願っています。私たちは告白することを愛しています。

「神は、私を愛しておられるので、まず自分のために私を創造されました。私の罪を予期し、その致命的な結果から私を救う完璧な計画を立てました。神として永遠に見聞きしてきたことに基づいて、真理を証言するために、受肉して天から降りてこられました。身代わりの死によって、私の代わりに裁きを受け、私は赦され、すべての非難から永遠に解放されました。私の中に永遠に生きる聖霊の賜物を通して、神の永遠の命を与えるために、死からよみがえられました。これらすべてを神がなさったのです。このことの栄光はすべて、それをなさった神に属し、それを受け取ったこの罪人に属するものではありません。」

これはすべての真の信者の喜ばしい告白です。「これらすべて、そしてそれ以上のことをしてくださったのは神です。決して私ではありません。神に栄光あれ！」

イエスを信じない人々は、自分たちの行いが悪であることを認めたくないため、光に近づきたがりません。プライドが彼らを阻んでいるのです。イエスの真理を拒絶することで、彼らはイエスの赦しという栄光ある真理から締め出されてしまうのです。

光に近づくとき、私たちは実際には何も恐れることはありません。なぜなら、真実は、イエスが私たちの代わりに「世の罪を取り除く神の子羊」として死んだからです。私たちが正直に自分の罪を認めてイエスのもとに行くとき、イエスは忠実で公正であり、私たちを赦し、すべての不義から清めてくださいます。

神に罪を告白すると、その信仰は神から授かった義とみなされ、神の目に責められるところのない者となるというのは、皮肉であり、また時代の恵みです。不信者は、自分たちは義人であると主張するため、この恵みを経験することはありません。イエスを離れて義人であると主張すると、私たちは有罪の罪人として自らの裁きを封印し、悪魔とともに嘘つきの立場を取ることになります。救いに関するこれらの真理は、イエスが述べた以上に明確に、また簡潔に述べられることはありません。

キリスト教徒の生活もまったく同じ原理で成り立っています。救世主であるイエスは、彼を信じる人々に限りなく御霊を与えてくださいます。ですから信者は、決壊したダム背後に溜まった水のように、そこから流れ出る「生ける水の川」の大波に流されるのです。救いはすべて神から来るものであり、弟子の人生もそうです。すべては信仰による恵みによるのです。